

桑名と鳴海の往来 一下里知足日記から

西 羽 晃

下里家は下郷家とも称するが、平家の一族で、熊野下里村（現・和歌山県那智勝浦町）に住み着いていた。後に桑名へ移住したらしい。天正9（1581）年に久貨丸という大船を造り、関東方面との交易にあたっていたようだ。慶長2（1597）年に桑名・鳴海・大垣の3家に別れたらしい。

鳴海下里家の二代目の吉親（寛永17=1640年—宝永元=1704年）は知足と号し、俳人でもあって、松尾芭蕉との親交があった。芭蕉はしばしば知足宅を訪れている。知足は子どものころ、寛文3（1663）年まで伯父である桑名の伊藤理左衛門家で育てられた。

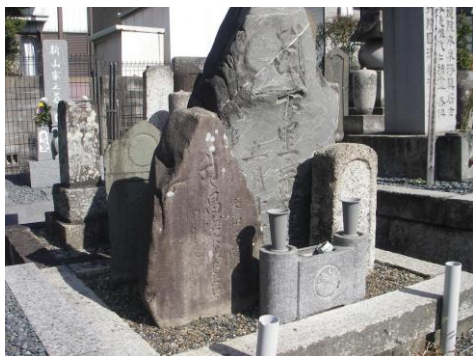
知足は膨大な日記を残している。また下郷家文書も多く残されている。彼は年始を始め、しばしば桑名を訪れている。その時のルートは様々で興味深い。桑名と鳴海の往来は普通には、宮（熱田）を経由する「七里の渡し」または佐屋を経由する「三里の渡し」が使われている。これは幕府の管轄下にある船会所が運営している。慶安4（1651）年の由井正雪の事件以後は、夜六つ時（日没ころ）以後は出港せず、夜間は航行しないとされている。ところが、元禄10（1697）年6月25日に「宮戻船ニ乗り」、翌「朝五つ比（ころ）宮へ着船。徒ニて鳴海へ昼前ニ何れも無事ニて帰宅」とあり、公的な船会所によらずに、夜の戻り船を船頭との交渉で利用したようである。

「七里の渡し」「三里の渡し」を通らぬ場合もあった。貞享元（1684）年10月4日「桑名より二つや迄舟ニ乗。賃60文。岡道ヲ戻ル」。これは特別に雇った船であろう。「二つや」とは現在の弥富市前ヶ須であり、弥富から真っ直ぐに熱田へ出るのが岡道であろう。桑名から鳴海から直接に渡ることもあったようだ。天和3（1683）年5月13日「くわなより戻ル。小船ニて。山崎え船着。山崎とは鳴海近くの小さな港である。

鳴海と桑名との直接の渡海は荷物船にしばしば見られる。貞享3年3月19日「大豆21俵松1本船につミ、くわなへ遣」、同年11月18日「桑名より大豆積船来ル。此船ニ米遣」。桑名の瓦師五右衛門が鳴海の瑞祥（泉カ）寺の瓦葺きに来たり、桑名の大工清右衛門が来て仕事をしたり、桑名との繋がりが多くみられる。

桑名の火事や洪水の記事も頻繁に書かれているが、貞享2年7月20日には、山田彦左衛門屋敷を見物している。この時は石取祭を見に桑名に行ったのであるが、7月18日に「今日石取神事渡ル。昨日ハ御銀荷物御泊りニ付、桑名祭り

延申候」とあり、幕府御用銀が桑名で泊まったので、石取祭は延期になった。



桑名・仏眼院にある下里家の墓



桑名・光徳寺にある下里家の墓1



桑名・光徳寺にある下里家の墓2